

『わたしのもとに帰れ』(ヨエル書 2章 12-32節) 2021.5.9.

<はじめに> 雨雲の上にも太陽が輝いていることは誰も否定しないでしょう。しかし、眼前に広がる現象・状況には注目しても、その先・背後にあるものを洞察できない人は珍しくありません。ヨエルは主からメッセージを預かり、人々にそれを伝えるために立てられた預言者の一人でした。

I 主の日が来る(1-11)

①雲と暗黒の日

イナゴ類の襲来を軍隊の侵攻に例えて描いています(1-11)。未曾有の災禍は豊饒の國を荒野に変え、地は震え、天体の輝きも隠し、人の防御・抵抗も乗り越えて圧倒的な威力で蹂躪します。諸国の民はもたえ苦しみ、その先の死の恐怖に震えおののきます。

②主の日は近い

この災禍の描写は主の日の予表・しるしです。主の審判は確実に訪れます。人はそれに抵抗できません。今、目の当たりに見る災禍に優るとも劣らない、前代未聞の厳肅な時が、すべての人に訪れます。だれがこの日に耐えられるだろう(11)、と預言者は叫びます。

③先頭に立つ主(11)

1節の号令は主の声です(11)。その声に災禍をもたらす軍勢は一气呵成に襲い掛かります。私たちが直面する苦難・試練の背後に、主が確かにおられます。来たるべき主の日に前に、主は私たちに真剣に向き合い、大切なことを示そうと先頭に立たれます。

II しかし、今でも(12-17)

①「わたしのもとに帰れ」(12-14)

災禍をもたらされた主は、民に呼び掛けます。預言者はその言葉を継いで、主の豊かなあわれみと恵みを指し示します。「心を引き裂け」は現状を悲しむだけでなく、主に対する真剣な悔い改めの告白です。その促しに応じる真摯な者を主は思い直してくださいませ。

②シオンでの角笛(15-16)

災禍の侵攻の角笛(1)は、同時に主の民へのきよめの集会の招集の角笛(15)です。断食は真に必須なものに心を向ける営みです。年代・性別・立場を越えて、あわれんでくださる主にすがり求める者を集め、共に主に近づき祈ることは、状況打開のカギです。

③祈りを導く預言者(17、ロマ 8:26)

非常時にどう祈っているのか、執り成す祭司さえ分からなくなっていたのでしょうか。預言者は彼らの祈りを導きます。弟子が祈りを教えてください、と言ったとき、主は「こう祈りなさい」と主の祈りを導かれました。状況に適った祈りの言葉を蓄えているのでしょうか。

III 主の日に続く物語(18-32)

①主は答えられた(18-24)

主はご自分に属するものをねたむほど愛し、深くあわれまれます。神の不朽の品性です。主は彼らの祈りに応えて、災いを遠ざけ(20)、雨を降らせて(23)地は再び産物を生じ(19,22)、人々を労働と収穫の喜びで満たされます(24)。主の大いなる御業です(21)。

②主を知る(25-27)

災禍を与えた主が「あなたがたに償う」とは、どういうことでしょうか。そこから主とはどういう御方と分かるのでしょうか。主による生活の回復で満足してはなりません。あわれんでくださった主の名をほめたたえ、すべてにまさる神、主がともにおられることを心に刻むのです。

③わたしの霊を注ぐ(28-32)

老若男女すべての人に、主はわたしの霊を注がれます。これはペンテコステ(使徒2章)で実現する預言です。霊を注ぐとはどういうことで、注がれた私たちはどうなるのでしょうか。夢・幻は、儚い不確かな人由来のものではなく、神である主が見せてくださるものです。

<おわりに> 主の日の二面性を主を知る者は弃えています。主の大いなる恐るべき日(31)にも、主の御名を呼び求める者はみな救われます。そして厳肅な主のさばきと報いが進む中にも、主が呼び出す者(32)を主は残されます。私がおの一人になれるように。(H.M.)